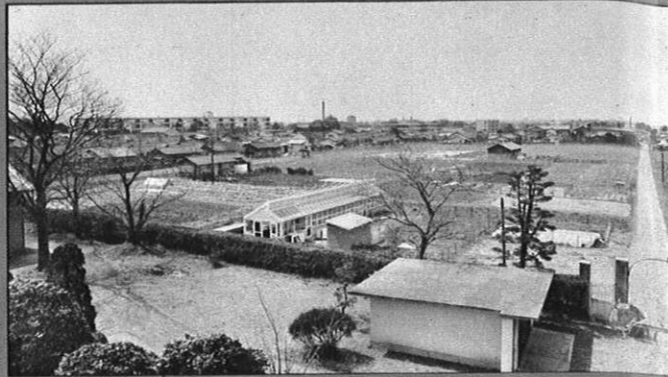


バッククロー

1964年の県政を振り返る



(5月) 2年連続の麦の被害。衆議員災害視察団が被災地を視察。



(3月) 懸案の県庁舎建設用地が、三月定例県議会において、熊本市神水町・出水町に正式決定した。



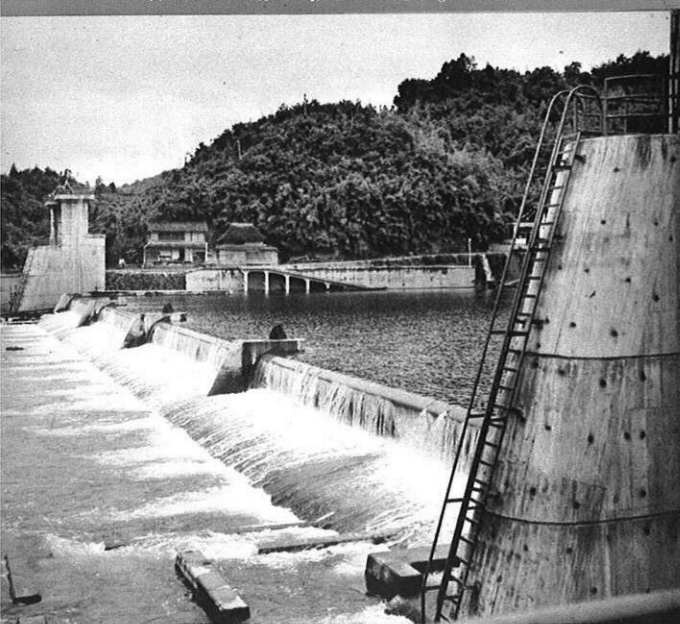
(5月) 阿蘇郡一の宮町に国立阿蘇青年の家が落成。若者たちの研修の場として発足。



(4月) 県民待望の新産業都市指定が不知火・有明・大牟田地区として正式に決定した。



(4月) 三太郎国道につながる、一級国道三号線八代地区新国道白さぎ橋・夕葉橋が竣工。



(6月) 玉名平野土地改良事業の一環として、二カ年の歳月を経て白石堰が完成した。



(4月) 日米知事会議に日本側知事代表として寺本知事が渡米。



上・市場の王座を占める貫禄は十分



右・五カ月で一キロ程度。抜群の成長率だ。
右下・エサは、小アジにキビナゴ。食欲は旺盛。
左下・人工飼育に成功した水産試験場試験槽
左中・とれたエビはまず、畜養池へ。



「つくる漁業」のチャンピオン
熊本県水産試験場の技術陣が、昭和三十八年、三十九年と、たて続けに放ったヒットに、ハマチの養殖成功と、車エビ人工飼育の成功とがある。
ハマチは、お正月には欠かせない「ブリ」の幼名。十分な飼料と管理によって、一・二キロから一・五キロの粒ぞろいに成長したハマチは、味、肉質の面で、天然ブリを上回る好評をえつつある。
昭和三十六年から牛深分場で続けられてきた研究で、ハマチの寄生虫防除に成功したのが、いわゆる「つくる漁業」のチャンピオンとして、ハマチを大きく押し出す決め手となった。
三年目の今年は一挙に十四万尾の養殖が見込まれている。
車エビも、昨年、水産試験場で初めて、稚エビ前期の飼料（珪藻類）の培養に成功したため、新しい水産業としての見通しができた。
現在、大矢野町周辺などで行なわれている車エビの畜養は、戦前からの長い歴史をもち、東京方面へ大量に送り出されているのだが、さらに一歩進めて、稚エビから飼育することもできるわけ。
今年中には着手される、熊本県種苗センターが完成の上活動を始めるとき、ワカメ・ハマチ・エビ・カニ・フグ：つくる漁業は無限の拡がりをみせるだろう。